

「知覚・認知心理学」受講生の皆様

訂正とお詫び

このたびは、弊社講座を受講いただきましてありがとうございます。

「知覚・認知心理学」の演習解説講義の内容について、下記の通り誤りがございました。該当部分につきましては、下記をご参照の上、学習いただければ幸いです。また、大変恐縮ですが、該当部分の解説動画はお聞き流してください。今後はよりいっそう、正確な記述に努めてまいりますので、何卒よろしく願いいたします。

記

演習解説講義問 1④極限法の動画において、

「上昇系列は明らかに音が聞こえる状態から小さくして行って聞こえる状態か問う」、「下降系列は聞こえない状態から聞こえる状態にだんだん音を大きくして行ってその段階でどこで音が聞こえるか問う」と口頭では説明していますが、

正しくは、テキストに記載の通り「極限法は標準刺激よりも大きい刺激から弱めていき被験者に判断を求める下降系列と標準刺激よりも小さい刺激から強めていく上昇系列の試行を繰り返して閾値を求める方法」となりますので、逆でございました。つまり、上昇系列は聞こえない状態から聞こえる状態にだんだん音を大きくしていく試行、下降系列は音が聞こえる状態から聞こえない状態へとだんだん音を小さくしていく試行となります。

他の例で説明いたしますと、図1のように、上昇系列は、下の①明るくない状態（＝標準刺激より小さい刺激）から②、③、④へと徐々に明るい状態へ刺激を強めていく試行を指し、下降系列は、上の①明るい状態（＝標準刺激より大きい刺激）から②、③、④へと徐々に明るくない状態へと刺激を弱めていく試行を指します。

なお、極限法は、絶対閾（刺激閾）、弁別閾、主観的等価点を測定可能な方法ですが、精度があまり良くないため、これらを測定可能で、より精度の良い恒常法が適切とされます。恒常法は図2のような方法となります。

以上
京都コムニタス

図 1

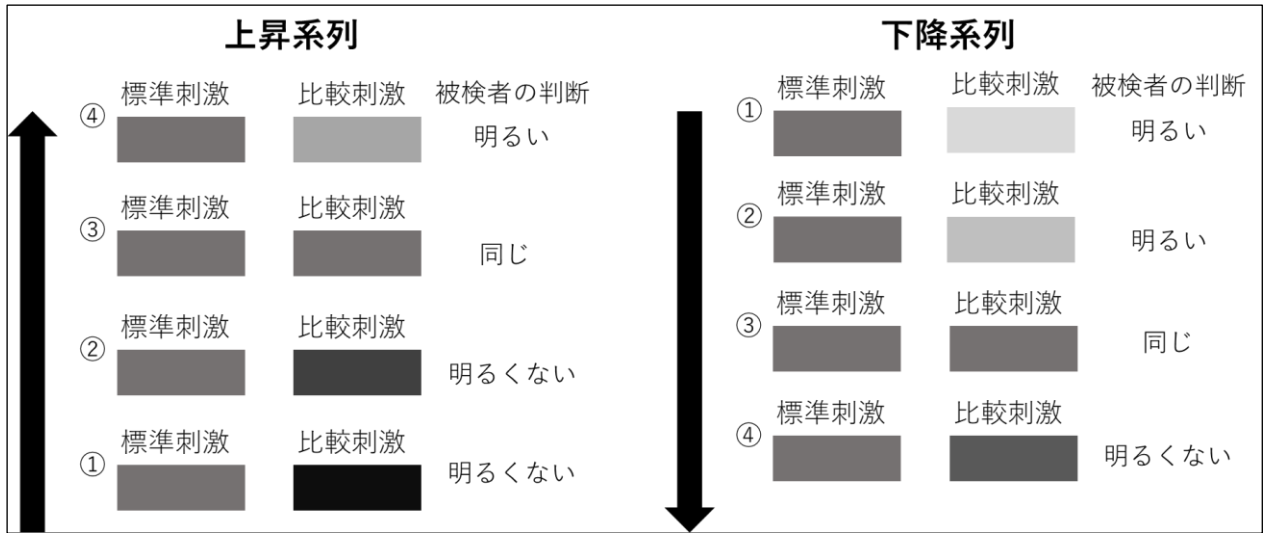


図 2

